

H. A. M

竹内洋岳（日本プロガイド協会）

最初に、H.A.Mとは私が勝手に名づけた勝手な名前なのでその意味の詳細は深く考えないように。もちろん国際的にもまったく通用しない和製英語どころか竹内語であるのであしからず。

H.A.M Hight Altitude Marathon 「超高所山岳耐久」とでもいおうか、2004年のプレモーンズンヒマラヤにおいて9カ国から集まったクライマーがジョイントを繰り返しながらチベット、ネパール、パキスタンにおいて4ヶ月半に及ぶ継続登山が試みられた。



まず、メンバーを紹介しよう。

ラルフ・ドゥイモビッツ ドイツ出身。K2無酸素登頂を含め8,000m峰11座登頂の経験を持つに止まらず、アンタルティカや南米での登攀と世界中の山を知り尽くした男。国際山岳ガイドとしての実績も長く、もはやヨーロッパのプロクライマーの中では知らない者はいないだろうビッグネーム。大手のエクスペディション・オーガナイズ会社を経営しており、オーガナイザーとしても優秀だ。ヨーロッパ登山界の中で「兄貴」的存在なのであろうか、カトマンズの繁華街を歩くと若い

クライマーから往年の名クライマーまでが彼の元に集まってきて、我々が座るレストランのテーブルは知らない間に人垣に囲まれてしまう。

ガリンダ・カールデンプラウナー オーストリア出身。国際山岳ガイドとして活躍しながら34歳にしてマカルー無酸素を含む8,000m峰7座登頂。元看護師の超パワフル系女性クライマー。その美貌？と超強気のパッションでヨーロッパの若い男の子クライマーの憧れの的だ。BCの我々のダイニングテントには彼女に一目会おうと連日、老若男クライマーが押し寄せた。実はラルフ夫人である。

そして、ヒロこと私、竹内洋岳。おしとやかで、控えめな典型的日本人。もはや説明不要。

このトリオがコアとなるメンバーで、ここにいろいろなクライマーがジョイントしてはチームとして登山が行われるのだ。

今となっては「後出しジャンケン」のようだが、ラルフ、ガリンダ、ヒロが企てたH.A.M2004の全容は、チベットの7,200mのXi-Feng Peakを順化のためにプレ登山し、その後無酸素アルパインスタイルでシシャパンマ南西壁、アンナプルナ北面、ガッシャブルムI、ガッシャブルムII、そしてあわよくばさらにK2へ継続しようという壮大な野望であった。

その前に私とラルフの「なれそめ」を話しておかなければならないだろう。

2001年、友達の大久保由美子から「ドイツの国際公募隊と一緒に参加してナンガパルパットに登

4. 海外登山記録

らない？」と誘われて、オウム返しに行く！行く！と勤め先の下承も取らずに返事をした上に費用までも振り込んでしまったのである。話を聞いたのが出発までには3週間ほどしかなかったからだ。直後、会社から大目玉を食らうことになるが、とにかく参加することとなるものの事件発生！大久保が急病のため参加を取りやめてしまったのだ。出発の1週間ほど前だろうか。今も、当時も英語がまるで喋れない私は英語が堪能な彼女が参加するから一緒に参加しようという安易な考えの持ち主であったのだ。彼女からの不参加の旨を知らせるメールを見た時には、突然、水でもかけられたようにPCの画面の前に立ち尽くした。しかし、その直後からはO型の血中楽天濃度が上昇したのだから、まあ、なんとかなるかーと手荷物だけの個人装備と共に誰に見送られることも無く成田からパキスタンに旅立った。事前にメールのやり取りは少々あったものの要は、指定された日時に指定されたホテルのロビーに集合ということだけだ。テント以外の個人装備はナンガパルパットに登れる道具を考えて持って来いということであった。

そして、指定されたラワルピンディーのホテルのロビーのその時間、お互いにきょろきょろしながら一度すれ違って、お互いに振り返って顔をあわせて「もしかして……」と出合ったのがラルフであった。これが最初の出会いだ。

公募隊、コマーシャルエクスペディションと聞いてエヴェレストで展開されているような三食ガイド付きの上にシェルパさんが靴紐を結んでくれて、寝袋の上げ下ろしまでしてくれるもんだと思うようでは日本の新聞、雑誌の読みすぎだ。

あんな公募隊はおおむねエヴェレストとかチョウ・オユーのノーマルルートとかを中心に行われているだけで、しかもそれはほんのごく一部だ。

考えてみればナンガパルパット級の山に三食ガイド付きで行ったところで登れるものではなかろうと、言う以前にそういうのが良いと思うような人はナンガパルパットなんか登りたいと思わないだろうし、もしかしてナンガパルパットなんて山知らなかったりして。

ヨーロッパで組織される公募隊の多くでは主催者は頂上へのガイドで報酬を得て収益を上げているのではなく、参加者が確実に登山を行える環境をオーガナイズすることで報酬を受けているのだ。ドイツ人9人、オーストリア人1人、スペイン人3人、リトアニア人1人に日本人1人のメンバーを前にラルフは「BCに入るときまではコマーシャルエクスペディションだったが、ここから先、我々は一つのインターナショナルチームだ」と宣言した。

ラルフはガイドではなく、あくまでもオーガナイザーなのだ。明日からの行動は必ず全員が参加してディスカッションが行われ決定していき、ラルフはその時の司会進行役であり、豊富な経験を持ったアドバイザーでありリーダーだ。そしてドイツ語、スペイン語、英語、そして私向けにジェスチャーを交えた子供英語などをはじめ5ヶ国語を操る語学力でメンバー間、BCにいる他のチームとの調整役としての一面も持つ。メンバーも基本的には8,000m峰に複数回登頂経験があることが参加条件という一定以上のレベルを持ったチームであり、登りたい者が費用を均等に負担してラルフというオーガナイザーに手配を依頼して登りたい山により合理的に登るというものだ。キャンプ間の移動、ルート工作は全員が参加し、ラストキャンプにも全員が同時に入る。チャンスと負担は全員が平等になることが大前提だ。一度、C2で悪天候に閉じ込められて食料と燃料がタイトに

なり始めたとき、がんばって天候の回復をここで待ちさらに上部へのルート工作をするか、BCに下るか、と全員でディスカッションを開いた際に、みんながヒロの意見を聞かせてくれと言うので、皆とちがう方向性を示そうと、日本的にチームを2つに分けてルート工作をするチームとBCから物資を荷揚げしてくるチームに分けたらどう？って言ったら！そりゃ、もう大変な大ブーイング！つまりそういうチームなのだ。

話は脱線するが、日本を出発する前に親しい人たちが集まって壮行会を開いてくれた。みんなが「気をつけて行ってこいよ」と声をかけてくれる中、ある2人だけは違った言葉を投げかけてきた。ひとりは某A大学OBの鈴木清彦氏。それは、ずばりひと言「死ぬなよ」であった。その言葉は急に参加を思い立ち、なんだか少し浮き足立っていた私の心を引き締めた。そしてもうひとりは某M大学の山本篤氏だ。私がただ一人の日本人としてヨーロッパのクライマーと共に登山をすると知って彼は「いいか、竹内！ヨーロッパのやつらに目にも物を見せてやれ！あいつら、いつも日本人のことバカにしやがって日本人の強さを見せてやれ！」と言い放った。いやいや、的外れなことを言っているのはヨーロッパのクライマーではなくて日本のごく一部からだと思うのだが……。考えてみればこの二人に某国際山岳ガイドの角谷道弘が加わり共に参加した1999年のリャンカンカンリ未踏峰への登山は今思えば相当に濃かったのだなあ……。うーん、すごい組み合わせだ。なにはともあれこの言葉のおかげでなのかどうか、私は登山期間中非常に調子が良く、圧倒的なパワーとスピードを発揮して先頭で頂上に立った。我々のチームと共に頂上に立った各国のチームと一緒にBCをあげたどんちゃか登頂祝賀パーティーでは

みんながひとりづつ私に握手を求め、「ヒロのおかげで登頂できたよ！ありがとう！」と抱きあって喜び合ったのだった。もちろん最も強く抱き合って喜び合ったのはラルフだ。私はラルフから日本においては手に入れることのできなかった登頂のチャンスを、いや、それ以前の登山のチャンスを作ってもらった。ラルフにとっては私の働きが良い効果をもたらし、自分がオーガナイズしたチームが成功を取めたことでアピールがあり彼の今後の仕事の発展に結びつくのだ。

登山が終わり、出会ったホテルのロビーで別れる2人はもはやオーガナイザーとクライアントの関係ではなかった。2人は硬く握手を交わし今度はパートナーとして登山をしようと約束したのだ。

そして2003年、ラルフ、ガリンダ、ラルフの友人であり弟子とでも言おうか若いドイツ人国際山岳ガイドの2人、ミッチーとデービットにやはりラルフの友人でありナンガパルパットで別のチームとして居合わせたフィンランド人のベイカーと私の6人でお互いをパートナーとしてチームを作りカンチェジュンガの北面に挑むことになる。これは私にとって初めての純粋な国際プライベートチームの一員としての参加となった。

残念ながらこの登山は悪天候に阻まれ7,200mまでしかルートを延ばすことができなかったがその厳しい登山がお互いの信頼関係をより強いものにし、ラルフとの友情もより強くなったのだ。

お互いに帰国して、メールで来年はどこへ行こうか？とやり取りする中から生まれた計画が今回のH.A.Mだったのだ。

事前の打ち合わせはメールで行われ団体装備は「ロープはあるから、だれかアイスクリュウちょっと余分はない？」って感じでお互いに持っているものを持ち寄って、決めた日にホテルのロビー

4. 海外登山記録

一集合という現地集合現地解散持ち寄り「お花見型」登山隊だ。

4月9日カトマンズのホテルに集合して我々の登山が始まった。シシャパンマの東隣にある7,200mのXi-feng Peakとシシャパンマの南西壁アルパインスタイルが第1ステージとなる。

第1ステージにはラルフ、ガリンダ、ヒロにスイスのクライマー、ロバート・ボッシュがメンバーとして参加した。

ロバート・ボッシュ スイス出身。通称ロビー。国際山岳ガイドという肩書きは彼を示すものではなく、彼はヨーロッパで超有名な写真家だ。例えば現在、マムートのカタログの写真は彼の作品だ。彼の右手人差し指は愛用カメラであるニコンFM-2のシャッターボタンを押しやすいように関節が曲げてある、でなくて、シャッターボタンの押しすぎで指の関節が曲がってしまっている。8,000m峰3座登頂だけでなく世界中のクライミングエリアを巡り登りまくっていて若いクライマーから尊敬される存在だがクライミングが得意なくせにテント内では起き上がれず寝ころがってしかいられないほど硬い体の持ち主だ。なんだか写真家というところと変わった気難しそうな人が日本には多いが彼は本当にフレンドリーでナイスガイ。登山中テントパートナーとして見た彼はなんだか全てが、てきと一な感じだったが後に送られてきた彼の写真集はそんな彼からは想像がつかないほどに繊細で美しい写真だった。人は見かけではないらしい。

もはや日課ともなったマオイストの道路封鎖に阻まれ、陸路で国境に向かうのをあきらめた我々はヘリコプターをチャーターしてカトマンズから一気に国境の街へ入る。国境でSARをチェック

するために体温を測り中国チベットに入るのだが川を渡っただけでそこはガラッと中国だ。今度の北京オリンピックでは聖火がエヴェレストの頂上を越えてくるので、あわせてこのあたりは一大インフラが行われ、道の舗装工事がいたるところで行われており街は開発ラッシュ。中国側の国境の街ザンムーは以前に来た時と比べて3倍ぐらいの大きさになっているようだ。ここはえらい急な斜面につづら折れに道がありそこに無理やりに家が建っているのだが、ビルのひとつであるホテルに入ると当たり前ながら道から1階のロビーに入るのだが階段を登り5階あたりまで行くとそこはつづら折れの上の道に出られるほどに無理やりだ。以前ドヤ街のように家が合った所には真新しいビルが無理やりに立ち並んでいる。驚くべきことにこれらのビルは底面積より上層階の方が大きい逆台形をしていて、狭い土地を有効に利用しようという中国四千年の知恵が生かされているのか？さすがなのか？

ここからはひたすらと荒涼としたチベット礫砂漠を車で進みシシャパンマ北面のBCに入る。その荒涼たる礫砂漠の中にぽつんと現れる「大本営」と書かれたBCの標高は5,000m。

実はあまり知られていないが私はここに来るのは2度目だ。1991年にシシャパンマの北面ノーマルルートに登りに来たことがあるのだ。その時の某大学山岳部登山隊はビジネスクラス料金を払った学生がエコノミーに座り、エコノミー料金を払ったOBがビジネスに座るというある意味すごい登山隊で、まあ残念ながらというか仕方ないというか当時大学2年生最年少という最下層カーストの私には登頂の順番は回ってこなかったのだ。まあ、別に当時も今でも、その登山に特別不平不満があるわけではない。1991年というまだこんなに

もヒマラヤ登山が大衆化する前に貴重な経験となったし、なにより当時まだハインリッヒ・ハラーの「セブンイヤーズインチベット」とだぶる雰囲気を残したラサを訪れることができたのは今思えば幸せなことだった。今のラサに当時の面影はまるで無い。

シシャパンマは日本人が登りすぎてしまって、カトマンズの「ヒマラヤ生き字引」Ms.エリザベス・ホウリーが途中からその記録を取るのをやめてしまったほどであるが今年は珍しいことに日本隊は入っていない。我々が目指すXi-Feng PeakはC1まではシシャパンマノーマルルートと同じでそこから東に大きくプラトーを横切っていく。シシャパンマのノーマルルートにはラルフがアレンジしたコマーシャルエクスペディションとスイスガイドチームが入っていて私たちはこのチームにジョイントするような形を取っていた。BCからABCヘヤクでの荷物の輸送やキッチンスタッフは共同である。こうして我々の登山費用を圧縮しているのだ。

我々と一緒となったスイスガイドチームはスイスの有名山岳プロガイド達10名ほどで組織されている。彼らは山岳ガイド達がよってたかって何か特別な課題にチャレンジしに来たというわけではなく、単にバケーションを楽しみに来ているのだ。自分の家のそばには無いようなでっかい山で純粋に登山とスキーを楽しもうと言うわけだ。我々がひーこら登っているところを楽しげに斜面をスキーで滑り降りてこられる様子はまるでどこぞやで見かける、スキー場の端をラッセルしている学生のように、切ない。

彼らはヨーロッパのいろいろなクライミングギアメーカーから新商品や開発中の製品を大量に預かってきてここでフィールドテストをするという

用事もあり、なんだか見たこともない様な形のテントやスキーバインディングや靴を持ち込んで、みんなで、あーでもない、こーでもないと楽しそうだ。その中で、彼らが請け負った最も重要なテストはなんとチーズだ。チーズ、あの食べるチーズである。このような長期のエクスペディションで凍ったり、溶けたりを繰り返しても美味しく食べられる日持ちするチーズはどれか？というスイス人にとっては死活問題ともいえる重要なテストを繰り返していた。こんな彼ら、さすがというか、他のチームが悪天候で登頂をあきらめる中わずか1日の好天をとらえ通常7,500mのラストキャンプのはるか下の7,000mから標高差1000mをしらっと登頂してしまった。ほとんどのメンバーは初めての8,000mだったそう。恐るべし。

さて、なぜXi-Feng Peakを順化プレ登山に選んだのかというとシシャパンマの他のチームにジョイントできるからというのはもちろんながら、ラルフが言うには「歩くだけ」だということだったからだ。労山の近藤さんが初登頂しているらしい……と、その記録によると歩くだけらしい……とラルフは言うのだ。確かにシシャパンマのノーマルルートに乗っかっているうちは歩くだけだったが、そこから外れてXi-Feng基部のラストキャンプとなるC2から見上げたXi-Fengらしき山は明らかに歩くだけって感じではないのだが……。まあ、正面に頂上までダイレクトに伸びるたいして急でないルンゼを登れば問題なく頂上に届くであろう。しかし、このルンゼは頂上まで近すぎてトレーニングにならないという理由で却下。あえて一番奥の左稜線を登ることにするが、これが大はまり！おい！どこが歩くだけだよ！かなり厳しい岩と氷のミックスが延々と続く。ドライツーリングで岩の小ハングを越えていく。4人が勝手にそ

それぞれバラバラと登っていく。なめてアルミのランポンを持ってきたラルフは氷の斜面でジリジリと滑っていくが気にしてなんてられない。ラルフー！いつになったら歩くだけになるんだよ！きっと、あの雪の稜線に出れば歩くだけだよ、たぶん……。なんて、ぎゃーぎゃー言いながらロックバンドを突破して、例の雪の稜線に出たら……。どこが歩くだけだよ



ー！触れば手も切れんばかりのナイフエッジ。そのナイフエッジの上はとても歩けない。右足は右の刃の部分に、左足は左に刃の部分に押し当てる。後ろから見るとちょうど平泳ぎが伸びきったような状態でペンギンのようにヨッタヨッタと進んでいく。足元の雲が晴れると、右には500m、左には700mすっぱりと底まで見える。私が先頭で進んでいくが後ろからラルフが、ヒー行けるかー？とか、なんとかとやかましいが、振り返ろうとするとバランスを崩して落ちてしまいそうだ。股の間から後ろを覗いて、なんだー？とか言い返す始末。まあ、確かにこの状態は「歩くだけ」とも言う。もう、みんなはラルフに大ブーイング大会だ。

ところで、ロープはどうした？取り付きからロープは一度もでてこないどころか4人が4本のラインで登ってきている。

落ちないところではロープはでてこないのだ。落ちたら死んじゃうけど、落ちないから大丈夫。氷河上でのクレバスは避けようのない危険なのでどんなにわずかな距離でも必ずタイトロープでつなぎあうが、岩、氷はお互いに自分が落ちなければ結果、誰も落ちないのである。ダメなら落ちる前に自己判断して降りなさい、ということだ。もちろん、無理にロープを使わないようにしているわけでは断じて無いのだ。つまりロープを出すのがめんどくさいからだ、じゃなくって、より「登るため」にロープは積極的に出すが、「安全を確保」するためのロープは、より安全性を高めるスピードが優先されるのだ。

こうして、時には縁につかまり、時には馬乗りになって延々と続くナイフエッジを突破して頂上に立つ。で、めでたし、めでたしとはいかないのだ。今来た道をまた戻らねばならない。やれやれ。

とりあえず、Xi-fengを登った我々は他のチームと別れ、最寄りの街ニヤラムまで戻り2日間ほど休養する。こんなチベットのぼつねんとした街にも自称インターネットカフェがありインターネットもメールのチェックもできる時代だ。街のシャワー屋と洗濯屋に行つて、いよいよシシャパンマ南西壁に向けて出発だ。

シシャパンマの南側のBCはこのニヤラムから直接歩いて向かう。泊まっていたロッジのスタッフに見送られ歩いて出発する様子はあまりにもヒマラヤらしくない。

街のはずれではヤクが我々の荷物を待っている。お役所のお達しでヤクは舗装道路の上は歩いてはいけない。せつかく新しくした舗装が汚れるでしょ！ってことらしい。

同じシシャパンマという山の北側と南側でこんなに様子がちがうのか！北側は見渡す限りの荒

涼とした礫砂漠だというのに南側は一面、緑に覆われ小さな花が咲きヤクや馬がのんびり草を食んでいる。そこに住む人々の様子もずいぶんと違うように感じる。北側ではちょっと目を離すと物が無くなったりしていたのにこちらでは、我々の落とし物をはるばる届けに来てくれたりするほどだ。

BCへはわずか往路1日半、復路1日間の距離だ。

BCは小さな池のそばにあり、緑と花に覆われ、目指すシシャパンマの南西壁やランタン方面の山が間近に見える美しいキャンプサイトだ。我々はここをレイクサイドリゾートBCと名づけた。

BCには先客がいた。ノルウェー人の若い2人組で彼らは高所登山の経験はあまり無いのだがシシャパンマ南西壁の写真を見て、このルートとこのルートの間には間隔があいているから、ここに新ルート拓いてみない？って感じでやってきたそうだ。結局、敗退したけどなかなかナイスクライだったと思う。シシャパンマ南西壁はとにかくでっかいアルパインルートだ。8,000m峰だとかなんとかとこだわらず、長くてでかいアルパインクライミングを楽しむには最高の壁だ。カトマンズからも街からも近いし、BCの周りにはボルダーもいっぱいあるし、もっとみんないっぱい来ればいいのに。

天候を待ち、いよいよスタート。BCから荷物をいっさいがっさいを担いで出発。小さなバックパックははちきれんばかり。スペースが無いのですでにBCからハーネスを身につけギアは全てギアラックにぶら下げていく。ダウンワンピースも着て歩く。暑くて死にそうだ。

壁の基部で1泊、そこから左上するようにダグ・スコットルートに合流していく。しかし、ダグ・スコットはなんであんなところからとりついた

のだろうか？彼のシシャパンマ南西壁の本を読めば読むほど、彼のルートファインディングのセンスが悪いことが知れてくる。



取り付きから一気に4人がそれぞれにロープも無しに、ダブルアックスをまじえながらフロントポイントクライミングで駆け上がり3時間弱ですでに核心部のロックバンドが間近に迫るところまでできていた。ハンギンググレイシャーを避けるように不安定なトラバースをしていたとき先頭を進んでいた私のすぐ後ろにいたラルフが突然、悲鳴のような叫び声を上げた！振り返ってみるとラルフがもがくように斜面に倒れ、滑り落ちようとしている！その後ろにいたロバートが慌てて押さえる！何があったのかわからないまま、駆け寄りアックスを打ち込んでラルフのバックパックを押さえる！上部から音も無く加速した落石か落氷がラルフの左足のすねにぶち当たったのだ。腰を下ろすステップも刻めない不安定な氷の斜面に止まることはできずラルフは「大丈夫、大丈夫」と足を引きずりながらもしばらく登りつづけようやくハンギンググレイシャーの一部に安定した陰を見つけ登りはじめてから初めてみんなでバックバックをおろして休んだ。

ボトルをみんなで回し飲みして、一息つきついでみんなの動きが止まったしーんとした中でこみ上げるように、ラルフが泣き始めたのだ。

くそ！くそ！くそ！

アックスを何度も何度も氷の斜面にたたきつけ、たたきつけ、涙を流しながらなき始めたのだ。落石に当たりながらもスピードの落ちなかったラルフに私たちはことの重大さに気がつかなかったのだ。

驚いて、ラルフ？どうしたの？

私の子供のような質問に「足がすごく痛いんだ……いったいどうしたらいいのかわからないんだ……」とだけ答え、泣き続ける。

ラルフ、見せてごらん!! ガリンダが彼の高所靴のジッパーを開き、ズボンのすそをまくと、青紫色に握りこぶしのようにはれ上がったすねが現れ、インナーブーツからはみ出している……。

うっわー……。ぶ厚い高所靴とぶ厚いダウンスーツのすそとの2重の上から当たってこんなになっちゃうなんてどんな勢いで落ちてきたんだ!!

ロバートが「ラッキーだったな、頭か顔だったら死んでたよ」と声をかける。

これは無理だ……。ラルフ、降りよう……。

いやだ！ぜったい降りない！

ラルフはザックを背負うとアックスを打ち込み斜面をよろよろと登り始める。その様子を見ながらロバートが「ヒロ、どう思う？ありやダメだ……」

心配そうにすぐ後につづくガリンダ。

ラルフが振り返りアックスを振り回しながら怒鳴る「ロビー！ヒロ！なにやってんだ！早く来い!!」ザックをその場に残し、ラルフに追いつき「ラルフ……、降りよう……ロックバンドに入ったらもう戻れない……」

アックスを氷にたたきつけながら、「わかった……降りるよ……だから……みんなは行ってくれ……お願いだ！一人で降りられるから行ってくれ

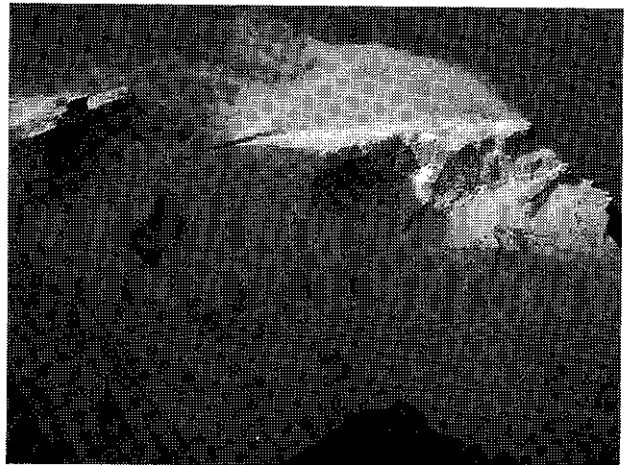
!!」

ラルフ!! オレたちチームだろ！そんなこと言うな!!

無念！敗退！天候も壁のコンディションも良かっただけに残念！

ダメとなったらもうここに用は無い。カトマンズに帰ろう。怪我で歩くのが遅いラルフと荷物を残してロビー、ガリンダ、ヒロの三人は早朝からBCをジョギングスピードでニヤラムに下り、コーラを1本立ち飲みするとすぐに車に飛び乗り、その日の夜にはカトマンズのホテルのガーデンで残念パーティーでカンパイ！とかやっていた。ラルフは2日後、荷物と共にヘリコプターで戻ってきた。

ラルフは幸い、骨に異常はなく腫れもひいてきている。この後、痛み止め潰けになりながらも継続していく。



用事があるので帰らねばならないロビーを見送り、さあ、今度はアンナプルナ、第2ステージが始まる。

アンナプルナBCへはヘリコプターで直接入る。天気が悪くて2日間ずれ込んだ上に、当日はパイロットが寝坊するという自然の脅威にさらされたが、ようやくBCに降り立った。

BCにはすでに次のジョイントメンバーが登山を進めていた。

イタリアのシモーネ・モローとカザキスタンのデニス・ウルブコフ、今や最強コンビの名をほしのままにしているこの二人はバルンツェの北壁に新ルートを拓いてきてからの継続だ。そしてもう一人はロシアのボリス・コルシュノフ。彼を紹介するとなると本一冊になってしまうので今回はさわりだけ。あの地球初の宇宙飛行士ユーリ・ガガリンの補欠にして、1991年56歳にしてエヴェレスト北面を無酸素単独登頂の現在70歳！さあ、この先が知りたくなりましたね。でも彼の話はまた今度。

それから、イタリアのアベル・ブランクはこのアンナプルナで14座完登ながら体調が不十分としてBCまでで登山を終了。本来はアメリカのエド・ビスチャー、フィンランドのベイカー・グスファッソンが来るはずだったのだが彼らが主催しているエヴェレストのコマーシャルエクスペディションが長引いてしまってキャンセル。エドとはナンガパルパットの時BCで会っている。彼もアンナプルナで14座完登だった。ベイカーはナンガパルパット、前年のカンチェジュンガを共にした仲だ。二人に会えなくて本当に残念。ベイカーは母国フィンランドでは「ベイカー人形」なるものがおもちゃメーカーから発売されているほどの国民的英雄だ。ちなみにムーミンには似ていない。

BCで1日レストして、そこからはアルパインスタイルで一気に頂上に向かうことになる、のだがこのレストで大事件発生！なんと食中毒が発生！ラルフ以外の皆が、もう上から下から止まらない。自分のテントとトイレテントをフラフラとゾンビのように行き来する惨状となった。

その日の午後までに他のメンバーはだいぶ回復

したものの私だけは胃痙攣をおこしてのた打ち回り続ける。明日からはC1を目指して行動を開始するので明日の朝に間に合わなければもうチャンスは無い。皆が私のテントを心配そうに覗きにきては帰れ、帰れとやかましい。うるさいーい！絶対帰るもんか！治る！明日になれば治る！うるさい！うるさい！とみんなを追い払ってテントの中で意識不明。

翌朝、恐る恐る目を覚まし体中に感覚をめぐらせて見る。胃はまだ重いが動ける。のろのろと準備を整えダイニングテントに向かう。みんなが口々に大丈夫か？無理するな？帰ったほうがいいんじゃないか？

ええーい！やかましー！大丈夫と言ったら大丈夫なんだー！とC1へ向けて歩き出す。しかし、アイスフォールに入った頃から私の体は再び、ひずみ始めた。5歩、歩いては吐き、10歩、歩いては胃を押さえてしゃがみこむ。水を飲んでも吐く、空気を吸っても吐く。

おえーっー！ええええ………！

もう、何も出てこないって。お前はいったい何を吐きたいんだよ……。

このアイスフォールのなかでの単独行動は危険すぎる。必死にラルフたちの背中を追うがじりじりと遅れていく。ラルフとガリンダが所々で待っていてくれるのがありがたいが、くやしい。

時にはダブルアックス、時には凍ったガラ場にクランポンでキックステップを繰り返しながら、合いの手のように吐く。それからさらにフラフラと歩き続けようやくC1にたどり着くとシモーネが「はーい！ヒロ！元気？………なわけないか？よく、ここまで来られたね。カミカゼってやつ？」と倒れこんでいる私の顔をうれしそうに覗き込んでいる。しかしイタリア人って生きモンは

4. 海外登山記録

どうしてこんなに元気なのかね？喋ってるか、歌ってるか、踊ってるかだよ。話をしているも座ってられない。手も足も頭もあんなにぶんぶん振り回しながら話したり、食べたりしてて疲れなのかね？

翌日、ようやくほぼ回復。C2に向かうが、C2には悪天候のため1日停滞。シモーネとデニス山中から響き続ける雪崩の音から一度BCに下る判断をして戻っていった。我々はどうするか？ラルフ、ガリンダ、私で時には声を張り上げる白熱したディスカッションが延々と続く。弱気なラルフを超強気の二人が押し切ってこのまま上に続けていくことになった。



そして、ついにBCからアルパインスタイルで5日間で頂上に到達。

こう書くとシンプルに登ったように見えるが、実際はアルパインスタイルなりの食料も燃料も最低限しか持たずにBCを出たものの体調やルート状況からネバって、ネバっての5日間。サミット日はもはや飲まず、食わず、そして、C3、C4では地吹雪で一晩でテントが半分までうずまっしてしまい眠ることもできずの状態、「登った」なんてもんではなく、もはやフラフラとなんとか「たどり着いた」というありさま。C2に降りてきたときには私の食料は「サッポロ一番塩ラーメ

ン」が4分の1、すでに2回使用した紅茶のティーバックが1つ、マンゴーのドライフルーツが2切れ。ガスは振ると「シャラン、シャラン……」と音がする程度……。

そして、バカバカと崩れるアイスフォールに雪崩、クレバス、落石。おまけにルートはラッセルとフロントポイントクライミングが半々という強烈な中途半端。

そんな中でも一番ヤバかったのが最後、BCに戻るC1下のアイスフォール。5月末日の標高4,000mの低いアイスフォールは目の前で爆破される映画のセットのようにドッカン！ドッカン！と爆音を響かせて絶え間なく崩れ続け、その崩れる間隙をぬって走って通過したり、飛び移ったりと駆け下ってまさに「脱出」。もはや「成功」などという甘美な言葉はもはや香りも残さずに忘れ去られてしまったかのようだ。



モレーンの安全部に逃れ、草の香り、小さな花の香りのするBC手前までたどり着いたときラルフがしみじみと「生きてるって悪くないねー」と言ったのがまさに目標の山に登ったことよりも強く感じた私たちの本音だったのだ。

本当にヤバイよ！この山のこのルートは。これまでこんなにも死んでいて、最近、登られていない訳が登ってみて本当に良くわかった。これはヤ

バイ。

再びBCから上がってきたシモーネとデニス是我々が登頂した翌日、頂上に向かうが途中でシモーネが体調を崩して下降。デニスが一人で登頂。例のボリスは勝手に変なところ登って行ってしまっただけで、ちがう山の頂上に登ってしまったり、行方不明になったり、クレバスに落ちたりしていたけど、とりあえず無事に下降。

こうして7日目にBCに戻り、再びヘリコプターでカトマンズに戻るという9日間のアンナプルナ・トリップは完結する。

BCで、靴を脱いで足をテーブルの上に投げ出して、次の山の話始める。この後、ラルフとガリンドはガッシャブルのⅠ峰、Ⅱ峰に継続する。ラルフは自分がアレンジしたコマーシャルエクスペディションへのアテンドでガリンドはそれにジョイントしようと言うわけだ。私は、それにジョイントするかどうかはアンナプルナが終わってから決めるということでまだ、会社等の承諾は得ていなかったのだ。どーしようかな？と考えているのは格好だけで心の中ではもう、会社に何て言い訳しようかなと考えている。ラルフとガリンドも一緒に言い訳を考えてくれるのだが……。衛星電話で会社の電話番号を押しては、切断ボタンを押している私のそんな様子を見ていたのは、BCに遊びに来ていたシモーネのスポンサーで工業用プラスチックパーツの世界シェア80%以上を持つというイタリアの大企業のオーナーであるフランコ・アルチャビス。彼も典型的なイタリア人らしく朝から晩まで手足をばたばたと振り回しながら喋ってるか、踊っているかだ。そんな彼が、今まで見たこともないようなまじめな顔をすると「ヒロ！一度帰れ、そしてボスと顔をあわせてちゃんと許可をもらえ」と私のイタリア人感を覆すよう

なことを言うではないか。

パキスタン再集合まではあと1週間ほどある。カトマンズでぶらぶらして直接パキスタンに入ろうかとも思ったがラルフ達も一度ドイツまで帰るので、フランコの助言に従って一時、帰国。

成田からその足で店に行って店長に切り出す。呆れ顔の店長から無理やりOKをむしりとり。5日間の日本滞在で再び機上の人となる。ちなみにその店とはICI石井スポーツ新宿店だ。

そして、2001年にラルフと初めて会ったパキスタン、ラワルピンディーのあのホテルのロビーで再会を果たす。わずか1週間離れただけだが硬く抱き合って再会を喜んだ。あのアンナプルナでの厳しい登山が我々をさらに強く結びつけたのだ。



そんな感動的な再会でこれからの我々の第3ステージが希望に満ち溢れた登山になるように思われた。

が、しかし、天気が悪すぎた。1ヶ月半居て、ちゃんと晴れたのはわずかに5日！やな予感はしていたんだよね。だって、普通はカンカン照りで溶けるか焦げるかって感じのはずのバルトロトレッキング中もずーっと雨だし、なんとBCへは腰までのラッセルだったのだ。我々がBCに着いたとき、先行のあるチームはすでに3週間の登山期間が過ぎていたがまだC1にしか到達しておら

4. 海外登山記録

ずさらに嵐でBCに降りて来れなくてC1に1週間も閉じ込められていた。キッチンスタッフや周りの連中は「どっかで死んでるんじゃないか」って騒いでいたけどしばらくしてよろよろと降りてきたらそのまま登山終了して帰っていった。

BCには数え切れないほどのチームが「好天気」を待っていた、というか「我々」を待っていた。ラルフ、ガリンダ、私と数人でC1まで腰までのラッセルをして通常、順化をしていれば3時間くらいのルートを7時間かけてたどり着いたときは夜中の2時の世間にもぎれて出発するのに、出てくる、出てくる！続々と数え切れないほどの人が我々の後についてくる！ついてくる！しかもそれは絶妙な間隔をたもちながら決して追いつかず、離れずにくっついてくる！

そしてその後は擦り寄ってくる、擦り寄ってくる！「どーぞ、ウチのロープとスクリュースノーバーを使ってください！使ってください！ぜひ！ぜひ！ぜひ！」ってね。ところが彼らが持つてくるロープはどこのチームも判で押したように「使い古しの11mm」なのだ。決してセミスティックの8mmとかダイニーマとかが出てくることは無い。「バカにしてるのかー！出すなら金か人手にしろー！」ミスター・ラルフとっても怒っておりました。我々しか居なかったアンナプルナと違ってこれだけいっぱいチームがいると色々めんどくさいもんだ。

しかし、その後は延々と続く悪天候にその手合いのほとんどが登山をあきらめて帰って行って最終的にはそこそ静かな山になった。

天気が悪ければBCで寝てればいいのかといえどそうでもなく、天気が悪く雪が深くポーター達がBCまで上がってこない。K2の50周年のため登山チームがK2に集中しポーターもそちらにかな

り取られてしまっていることもあって我々の荷物がいっこうにBCに届かない。ついにBCの食料、燃料が切れかけてしまい、しかたなくヘリコプターで当面の食料等を荷揚げする騒ぎまであった。天気は不安定に安定してしまっている。どうやら今年バルトロ名物「ハズレ年」だ。

ラルフは仕事だけれどガリンダと私はジョイントということですのですでに順化しているからアルパインスタイルでGI、GIIへさっさと登ってさらにK2へ行こうと思っていたけれど、もはやそれどころではなくて動けるときは他のチームのパキスタンハイポーター顔負けに荷上げして、ラッセルしてそしてラルフのお客さんとロープを結んでともはやスタッフの一員だ。

C2までは何度か入り、ガリンダと共に「明日C3、あさって頂上！」とかと皮算用すること数回。しかしその度に吹雪の中とぼとぼとBCに戻るといことがつづき結局数えてみると20日以上はBCで寝て過ごしていたことになる。やれやれ。毎日、動き続けていたXi-feng、シシヤパンマ、アンナとは大違いだ。順化の有効期限はすでに切れかけているんじゃないのか？

我々のパーミッションの期限は7月20日まで。その日は相変わらずBCで寝てた。すなわち登れる気配全くなし。ラルフのお客さんたちは登山を中止して帰ることになってしまった。

それでもしつこく我々は登ることにしていたので

7月22日に吹雪の中C1へ、無理やりにルートを伸ばしてついに7月25日にガッシャブルムI峰に登頂。

登頂直後にインターネットのさるホームページには速報としてこんな記事が掲載されたそうだ。

「パキスタン、GIにおいては、“雇われた日本人専門家(?)”が全てのルートメイキングを行

い、しかも頂上のわずか手前で後ろに続く各国のメンバーに頂上をゆずると自らは頂上を踏まずに下降した！」なんじゃそりゃ！

これにはラルフが事務所を通じて抗議しこの記事はすぐに削除訂正された。

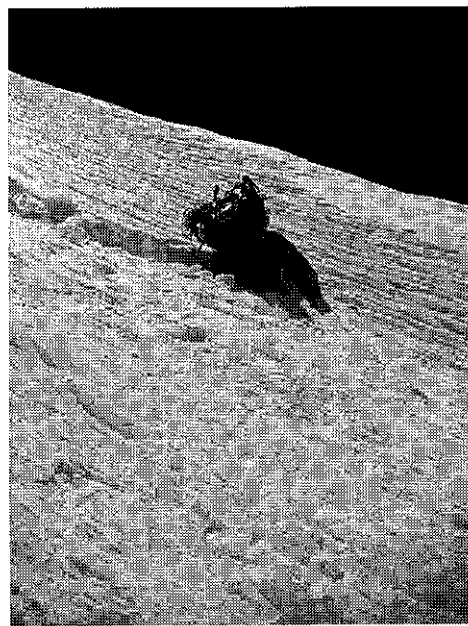


正確には私は雇われてもいないし専門家でもない！確かにかなりの部分のルートメイキングをしたが全てではない！そして私は頂上をゆずったのではなくて、「ゆずられた」のだ。

かわるがわるラッセルをしていたラルフをはじめバスク、オランダのメンバーは頂上の手前で立ち止まると「さあ、この頂上はヒロのものだよ！真っ先に頂上に立ってくれ！」と私は皆に肩をたたかれ頂上に送られ、そして、みんなを頂上で迎えたのだ。うれしかった！本当にうれしかった！

しかし、いやはや全くえらい目にあった。ジャパニーズクロワールの中はチリ雪崩が流れ続け何度も流されそうになりジャケットの胸元から入った雪でお腹が膨れあがっている。そしてその後は胸までのラッセルだ！私が「胸入れ、ヒザ入れラッセル」しているとくっついてきたバスクのカルロスが「ムーチョ！ムーチョ！雪が多すぎる！今年は大ダメだ！無理だ！」とやかましい。

うるさい！これぐらい日本じゃ普通だ（？）！！バックパックからシャベルを取り出し雪を切り



崩しながら進む。おおお、なかなかいいじゃんコレ！

「コマツ！（小松製作所）コマーツ！コマーツ！コマーツ！！」おかげで私の名前はしばらく「ヒロターア・コマーツ」になったしまった。人の名前を勝手に変えるんじゃない！正しくはヒロタカ・タケウチだ！

しかし、まったく、マシーンだのコマツだの、たまには「ナントカの精密機械」とか「ナントカの貴公子」とか呼べ！無理か……。

「タケウチさんなら行けば登れますよ！ルートも行けばわかりますよ！」とニカッと笑いながら言っていた明大山岳部の“誉”加藤よしのブーの顔が思い浮かんで腹が立つ！帰ったらとちめてやる！

しかもラストキャンプから頂上までの標高差は1000mだ。おおむねそんな感じで頂上にたどり着く。

そしてだ、BCにいったん下り2日間レスト。そしてGIIへ！！

と明日は夜中の2時にBCを出て空身でスピードを上げ、C1に残したテント等のデポを回収し

4. 海外登山記録

で一気にGIIのラストキャンプに入り、頂上へと考えガリンドと準備をしていると……。ラルフが「ヒーロー!! ビックプロブレム!!」彼のもとに行くと……。なんで、これがここにあるの?!

彼の足元にあるのは私とガリンドがC1に残したはずのテント、寝袋、ダウンワンピース、燃料……。とにかく全て!他のチームのハイポーターが間違えて荷下げしてしまったのだ!!そのハイポーターは「アイムソーリー、あいむそーりー」としきりに謝るが、謝って済むかー!!今晚の2時にオレたちは出発するんだ!今から元の場所に戻して来い!「OK!OK!OK!」と言うので、いいな!絶対に上げておけよ!

ところが夜の8時頃そのポーターがやってきて「お腹が痛いからいけない……」ふざけるな!私も相当に怒っていたけど、ガリンドが相当に怖い!まあ、いまさらどうこうしても始まらないので荷物をさらに減らし自分たちで担いで行くことにしたが、翌日2時、吹雪……。

1日遅らせるが気象予報は最悪。翌日にはラルフたちはゴンドコロ・ラに向けて帰路につく。私とガリンドは2人で残って粘る予定だったのだ。数時間話し合い……。中止……。無念!

4ヶ月かけた割には7200mピーク、アンナのアルパインスタイル、GIスタンダード。ちょっと物足らなかったかな?GIIとK2のパーミッションが無駄になってしまったよ。

まあ、いいか、ラルフ、ガリンド、また来よう!そして、H.A.Mはつづくよ、どこまでも?

竹内洋岳 1971年東京生まれ

1991年 シンジャパンマ(8,027m)北面

1995年 マカルー(8,463m)東稜*

1996年 エヴェレスト(8,848m)北北東稜*

K2(8,611m)南南東リブ*

1997年 エヴェレスト(8,848m)南東稜

1999年 リャンカンカンリ(7,535m)未踏峰*

2000年 カナディアンロッキー・アルバータ峰周辺

2001年 ナンガパルパット(8,126m)北面*

2003年 カンチェジュンガ(8,586m)北面

2004年 シーフエン・ピーク(7,250m)*

シンジャパンマ(8,027m)南西壁

アンナプルナI峰(8,091m)北面*

ガッシャブルムI峰(8,068m)ジャパニ

ーズクロワール*

*は登頂